

「二元論」を考へる

会員 川上清美

前提として

明治の開国期、日本及、日本人が置かれた真に困難な状況について本質的に見抜いてゐたのが漱石、鷗外であった。

物質面での開化(現象面)はなんとかまねはできても、精神面では、神経衰弱になつてしまふほど、外発的開化を強要された国民は、本質的に苦境にあると言はざるを得ない。

〈資料① ②参照〉

西欧の近代化の原動力

明治以来、日本が追ひ付け追ひ越せと、絶えず目標として来た欧米先進国の、近代化の原動力は、どこにあったか。その開化(近代化)のエネルギーはキリスト教が持つ「絶対者」と個人との対峙から生じたのである。

*数世紀にわたる神への讃歌と凝視とが人間をして神にそむく力をたくはへしめたのだといへよう。かくして、近代もまた明確な理想人間像のモデルを神に仰いでゐたのである。〈近代の宿命〉

*個人主義ばかりではない、民主主義にしても自由にしても平等にしても、すべてが神の問題に結びついてゐる。〈個人主義からの逃避〉

「二元論」発生の基盤

「神への讃歌と凝視」といふキリスト教社会の伝統(歴史)が、二元論的発想を生み出した。「近代の宿命」で福田恆存は、この考へ方を基調として西欧近代社会の発展を論じ、日本の近代化の宿命的な困難に言及する。

明治の開国よりすでに八十余年を過ぎ、近代化のボロをさらけ出した敗戦国日本。「二元論」の発想を持つ西欧人の、思考力の強靱、執拗さを福田ほど、深刻に受けとめた知識人はゐないのではないか。明治の漱石、鷗外の提示した難問を福田は引き継ぎ、生涯格闘を続けたと言つてよい。

近代人たるには「二元論」を心得るべきである

近代化はとどまるところを知らない↓必要悪

あまりに目まぐるしい変化発展に適応して、生きて行くために、近代人たるものは「精神の政治学」を身につける必要がある。

この「精神の政治学」について福田は各所で述べてゐる。「個人の純粋性と支配」被支配の自己とのあひだにそれぞれの個性に応じた均衡を企てるもの。〈近代の宿命〉

「マスコミ」を個人の生活の一部に位置づけ、集団的自我にそのつきあひをさせて、個人的自我は深部に取っておくといふ、近代人の「精神の政治学」を心得て…〈政治主義の悪〉

絶対者を持たぬ国の国民は、「個人的自我」の純粹性をどこから汲み出すか

*問題は、すべてはフィクションであり、それを協力して造上げるのに一役買つてゐる国民の一人、公務員の一人、家族の一人といふ何役かを操る自分の中の集團的自己を一つの堅固なフィクションとしての統一体たらしめる原動力は何かといふことである。それは、純粹な個人的自己であり、それがもし、過去の歴史と、大自然の生命力に繋がつてゐなければ、人格は崩壊する（清水幾太郎論）

「過去の歴史」と「大自然の生命力」これが福田恆存及び日本人の「二元論の基盤」と考へて良いのだろうか。これは福田先生の「神がかり」的思考なのかもしれない。今後、深く考へてみたいところである